様式１－１　地域子育て支援拠点事業評価シート

１　親子の居場所事業

目指す拠点の姿	（参考）2期目振り返りの課題	自己評価（A～D）	
		法人	区
①利用者を温かく迎え入れる雰囲気のある場になっている。	・これまで、拠点に来所している利用者からのニーズ把握は行ってきたが、拠点を利用していない人も含めた鶴見区全体のニーズ把握が課題である。 ・把握した鶴見区のニーズを区と拠点で共有し、ひろば運営へ反映できるよう検討していく。 ・多様な生活背景の養育者と子どもが利用しやすい場になるよう、情報提供等の工夫を考えていく。 ・拠点を含め、区全体で高年齢児の居場所について検討していく。	A	A
②多様な世代、性別等の養育者と子どもが訪れる場になっている。		B	B
③養育者と子どものニーズ把握の場になっている。		A	A
④親（養育者）自身が親として育ち、また子どもが育つ場となっている。		A	A

評価の理由（法人）

（主なデータ　○年間利用者数（人）

	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
わっくんひろば	23,375	22,898	20,741	17,050
サテライト	－	14,071	14,923	11,959
合計	23,375	36,969	35,664	29,009
市場矢向地区の利用者数の推移	2,040	13,638	13,419	10,689

サテライト開所により、立地の市場矢向地区の利用者数が大きく増加した。

○鶴見区全区アンケート結果（令和元年度実施、区内全域2,349件）
拠点の認知度　わっくんひろば76%（区内全域で認知度が高い）　サテライト42%（矢向、市場地域での認知度が高い）
拠点の利用度　わっくんひろば48%（区内全域で利用が多い）　サテライト21%（矢向、市場地区での利用がほとんど）
子育て支援施設を利用しない理由：「一人で行きにくいから」「家が遠いから」「時間がないから」「人と接するのが苦手だから」等

○拠点利用者アンケート結果（毎年実施 以下は令和元年度実施内容、わっくんひろば156件　サテライト161件）
・利用の満足度　とても満足、満足　わっくんひろば98%　サテライト99%
・利用してよかったこと　1位：こども同士の遊び　2位：スタッフとの会話　3位：他児の様子を見られた　4位：親子の交流
・利用することで気分転換ができた（そう思う、どちらかと言えばそう思う）　わっくんひろば96%　サテライト100%
・スタッフは話しやすい雰囲気である　わっくんひろば100%　サテライト100%
・スタッフや出会った保護者との交流を通して、子育てに役立つことがあった　わっくんひろば95%　サテライト96%
・子どもの成長をイメージできるようになった　わっくんひろば93%　サテライト95%
・他の人が困っているときに手伝おうかと声をかけたり、困っているときに手を貸してほしいといえるようになった　わっくんひろば72%　サテライト74%
・子育てで困っていることや悩みを他の保護者と話し合うことができた　わっくんひろば70%　サテライト81%

○実施イベント（令和元年度実績　わっくんひろば、サテライト合わせて記載）
・保護者の交流を目的としたイベント　双子の会（3回）、アラフォーママの会（4回）、25歳以下のママの会（2回）、ひだまりんの会（未熟児の母の会）（2回）、赤ちゃんあつまれ（11回）、しゃべり場わっくん（2回）
・妊娠期から切れ間なく参加できるイベント（毎月開催）
こうのとりくらぶ（マタニティ向け）、赤ちゃん体操とママビクス（4カ月まで）、タッチケア(4カ月頃)、ベビーマッサージ（4カ月から10か月ぐらいまで）、手遊びわらべうたの会（0歳児中心に発達に合わせてグループ分けをして実施）、絵本の読み聞かせ（0歳児～大きいお子さんまで）、ちっちゃな人形劇（1歳前後から大きいお子さんまで）、工作の会（1歳前後から大きいお子さんまで月2回開催）、わっくんあそびクラブ（1歳半から大きいお子さんまで隔月開催）
・その他のイベント　コンサート（3回）、クリスマスおはなし会（1回）、ひな人形、五月人形撮影会（1回）、おもちゃドクター（2回）
○保護者向け講座（詳細は子育て相談事業に記載）

敷居が低く、間口の広いひろばであること、利用者それぞれが安心して過ごし、自分らしい利用のしかたができる居場所づくりを大切にしている。10年を過ぎ、多くの利用者と交流する中で、子育て世代を取り巻く環境、養育者の様子の変化を捉え、時代に合った居場所づくりに取り組んでいる。

１　また訪れたくなる、交流が広がるひろば
初めてでも、一人でも、安心で自分らしい利用ができ、繰り返し利用する中で交流が広がっていくひろばづくりを心がけた。
○初来所者に対し、利用案内をわかりやすくしたり名札を色分けして周囲が配慮しやすくするなどの取り組みをしている。また、ニーズに合ったイベント情報の提供をして、再来所へとつなげている。また、一人で来所してもくつろいで過ごせるように、大人向けの本や雑誌、漫画などを整備している。
○様々な年齢の子どもが安全に遊べるように、エリア分けを明確にしたレイアウトに変更した。また、兄弟児の授乳や落ち着きたい子どものために相談室を適宜開放し、多様な状況に対応している。
○共通の要素を持つ利用者同士の交流のきっかけを作るイベント（双子の会、アラフォーママの会など）を継続的に開催し、多くの参加者が盛んに交流する様子が見られている。特に利用が多いアラフォーママの会は拠点から遠い馬場地域ケアプラザでも開催し、多くの親子が参加した。
○養育者同士の会話のきっかけづくりのために、子育て以外のテーマを設定した交流会「しゃべり場わっくん」を開催。養育者同士だけでなく、ボランティアも交えて交流が進んでいる。
○子育てサポートシステムのひろば預かりを行う提供会員やイベントに関わるボランティアがひろばで多く活躍し、多様な交流を通して、利用者が地域の活動を知る機会となっている。

２　多様な人が、それぞれの時間を過ごせるひろば
外国につながる親子、ひとり親家庭に向けては、拠点の周知をさらに強化した。ネットワーク事業との連携も深め、区全体の取り組みへと移行している。妊婦、父親は取り組みの成果があり利用者数が増加している。

〇【外国につながる親子のための取り組み】
・ひろばの案内チラシを6か国語で準備し、国際交流ラウンジやホームページ等で掲示し、周知を強化した。
・来所時、翻訳アプリなどを利用して丁寧な対応を心がけたことで、継続的に来所し、友人への紹介につながった例も見られている。
・遊びを通じて簡単な日本語を学ぶイベント「おやこにほんごたいむ」を国際交流ラウンジと共催、ボランティアも参加して開催した。（3回）多言語のチラシ等で周知に努めたが、参加者が少なく、平成30年度で終了。同ラウンジと今後について協議し、ネットワーク事業へと展開した。
〇【ひとり親家庭への取り組み】
・区役所の児童扶養手当現況届の際に、拠点のPRチラシや女性相談のチラシの配架した。拠点に来所時には資料を手に取りやすいような工夫を行った。
・利用のきっかけ作りとして、ひとり親サポート横浜と共催で「ひとり親サロン」を拠点で開催した。同機関と連携を深め、相談対応などに役立てている。
・子育て以外の母親自身の悩みを相談しやすいように、女性相談を隔月で実施し、相談を目的とした来所も見られている。

〇【妊婦とそのパートナーへの取り組み】
・横浜子育てパートナーが両親教室に出向き拠点のPRを行っている。初来所の際には、区内の子育て支援情報をセットにしてお渡ししている。
・出産準備、産後の不安の解消のため、妊婦とその家族向けのイベント「こうのとりくらぶ」を毎月実施。沐浴体験、ミルク作り体験、ひろば利用の親子との交流、地域のボランティアとの交流や子育て支援情報の提供を行った。参加者の多くが、産後も拠点を利用している。
・妊娠中も産後も拠点を継続的に利用しやすいように、妊婦と新生児の母が手芸を行う会を準備している。サテライトでは、赤ちゃん向けのイベントへの参加を促すチラシを作成し周知に努めている。
〇【父親へ向けた取り組み】
・区内市立、私立保育園の協力を得て、男性保育士によるパパ講座を実施し、父親同士の交流を促した。
・父親のひろば利用が増え、子育て相談も増えている。

3　ニーズを把握するために

〇区と共に全区アンケートを作成、実施し、子育て世代の大規模なニーズ調査を行った。鶴見子育て支援ネットワークの協力を得て広域で調査することができた。拠点利用のない養育者の現状も把握でき、ネットワークと共有し、今後の拠点運営に生かしていく。
〇ひろば利用者アンケート（10～12月）にて、拠点利用のニーズ調査を行い、結果から、事業の効果を確認できた。

4　子どもとの過ごし方を体験しながら、親子が育っていくひろば

講座やイベントを通して学びの機会を提供するとともに、利用者同士の交流が進み、互いが支えあう様子が見られている。様々な年齢、生活背景の親子が関わりあうことで、こどもの成長、親としての成長につながる時間となっている。スタッフはさりげなく会話の中から親同士をつなぐ手伝いをすることもあるが、利用者同士の支えあいを見守っている。
〇スタッフが何気なく声掛けし、利用者同士の交流が始まる様子が見られている。利用者同士の交流が進み、お互いが支えあう姿がアンケート結果にも表れている。ひだまりんの会（未熟児の母の会）は利用者が主体となり、乳幼児から小学生までが交流し支えあっている。双子の会では、妊娠期から利用者同士が継続的に交流し支えあい、会をきっかけとしたサークル立ち上げにもつながった。コーラスの会「うたごえわっくん」は、活動が10年間継続し、メンバーが入れ替わる中でも、長い間利用者同士で引き継がれている。
〇高年齢児の居場所の情報提供を積極的に実施した。（区内90か所の公園情報、保育園園庭開放、つるみふらっとる一む（※）や子育てサークルの情報提供）紹介された情報を利用して地域の遊び場へ行っていることが利用者アンケートで確認できた。
※つるみふらっとる一む：区内51か所で、地域の担い手が運営する子育てサロン。以降子育てサロンと表記する。

評価の理由（区）

① 定例会、スタッフミーティング等で利用状況を確認しながら、安心して安全に過ごせる場づくりを拠点と話し合っている。
② 区のさまざまな事業の中で、拠点を周知した。妊婦に対し、両親教室内で横浜子育てパートナーがPRする時間を設け、拠点の周知を行った。ひとり親にむけての利用促進や情報提供方法を拠点と検討し、調整を行った。児童扶養手当受付時に拠点のチラシの配架、情報提供を行った。外国籍の親の居場所の利用について、拠点と検討を重ね、広場での取り組みを進めている。
③ 区民ニーズを把握するために、子育て世代への全区アンケート調査の内容を拠点と検討し実施した。その結果を広場の運営に反映させていけるよう区・拠点と話し合いを続けていく必要がある。
④ 区づくり事業で、子育てのこつ講座を継続し、拠点と共催し、親自身が子へのかかわりを学ぶ機会を設けている。また広場イベントをきっかけに親同士がつながり、自主グループ活動に発展し活動を始めているものもあり、継続的な活動になるように、拠点と支援を継続していく。

拠点事業としての成果と課題

（成果）
・初来所者が安心して利用でき、誰もが何度も訪れてもらえるような工夫に努めることで継続利用につながっている。継続の利用者は、交流イベントなどを通して親同士の交流が深まり、助け合い支えあっている様子も見られている。
・サテライトは開所4年目を迎え、様々なイベントに取り組んだことで、多くの利用者が得られ、地域に密着した居場所として機能している。
・様々な形式、内容の講座が好評に継続でき、利用者に学びの機会を提供し、それをきっかけとした情報提供、相談へとつなぐことができた。子どもとの接し方に重点を置いたイベントを展開し、体験し交流しながら学んでいく姿が広い年齢層で見られている。
（課題）
・母子保健コーディネーターと共に妊娠期から産後への継続した支援となるように、妊婦が訪れたくなるきっかけづくりや産後の継続利用につながるようなひろばづくりに努める。
・拠点へのアクセスが悪い地域へ向けて、公園やふらっとる一むへ出向いての情報提供や相談、遊びの紹介を行うなどのアウトリーチの実施を検討する。
・多様な生活背景の養育者と子どもが利用しやすい場になるよう、これまでの取り組みを継続する。
・父親の利用が増え、父親ならではの思いを抱えている姿が見られる。気軽に相談をしやすく、父親同士が交流しやすい居場所を作っていく。

振り返りの視点
ア　いつでも気軽に訪れることができ、安心して過ごせるような配慮、工夫をしているか。
イ　居場所を訪れる様々な利用者（養育者、子ども、ボランティア等）の間に、交流が生まれるように工夫しているか。
ウ　多様な養育者と子どもを受け入れる配慮や工夫をしているか。
エ　養育者と子どものニーズを把握するための工夫をしているか。
オ　把握されたニーズを区こども家庭支援課や関係機関と共有し、ニーズに応じて必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
カ　子どもの年齢・月齢に応じた遊びの環境が整備されているか。
キ　子ども同士の関わりが尊重され、子どもが健やかに育つために必要なことに養育者が気付き、学ぶ機会を提供する場となっているか。
ク　養育者同士が相談、情報交換し、課題解決し合う仕組みや仕掛けがあるか。

様式１－２　地域子育て支援拠点事業評価シート

２　子育て相談事業

目指す拠点の姿	2期目振り返りの課題	自己評価（A～D）	
		法人	区
①養育者とスタッフとの間に安心して相談できる信頼関係ができ、気軽に相談ができる場となっている。	・育児支援センター園、親と子のつどいの広場、乳幼児一時預かり事業実施施設を中心に連携体制の構築ができつつあるが、今後、養育者をより広く多様な関係機関に繋げていけるよう、さらに検討していく。	A	A
②相談を受け止め、内容に応じて、養育者を関係機関につなげている。また、必要に応じて継続したフォローができている。		A	A

評価の理由（法人）

（主なデータ）　※新型コロナウィルス感染症拡大防止のためイベントやひろば機能中止（2020/2/22～）　サテライト開所前の平成28年とそれ以降を比較した。

〇相談件数（件）

	*1平成28年度	平成30年度			令和元年度		
	わっくんひろば	拠点計	わっくんひろば	サテライト	拠点計	わっくんひろば	サテライト
ひろば相談	4,039	7,409	3,408	4,001	6,871	3,252	3,619
個別相談	308	442	195	247	855	168	687
専門相談 *2	308	584	310	274	460	241	219
発達相談	11	11	11	－	19	19	－
女性相談 *3	－	－	－	－	8	8	－

*1　平成２８年度（2期目）サテライト開設前
*2　助産師、保育士、保健師、歯科衛生士、栄養士、保・教育コンシェルジュ、看護師（わっくんひろばのみ）
*3　NPO法人かながわ女性のスペースみずら　2019年4月～

〇拠点利用者アンケート(毎年実施 以下は令和元年度実施内容、わっくんひろば156件　サテライト161件）
「スタッフと話しやすく些細なことでも親身に聞いてもらえて相談できた」、「専門相談で個人的に話が聞けた」、
「気軽に安心して相談できるのがよい」、「必要な情報が得られた」等
〇鶴見区全区アンケート（令和元年度実施　2,349件）
・子育てを相談する相手の有無　いる：97.1%　＞　いない2.8%
1位:家族92.9%　2位:友人76.8%　3位:保育園15.8%　4位:拠点12.5%　5位:子育て支援者10.6%　6位:SNSｲﾝﾀｰﾈｯﾄ10.6%
〔参考〕地域による差/拠点に近い地域：拠点＞子育て支援者　遠い地域：拠点＜子育て支援者　サテライト地域：3位拠点
・不安を感じたり悩んでいること
1位:自分の時間がない38.1%　2位:しつけ28.3%　3位:兄弟児の育児22.4%　4位:入園21.9%　5位:発育・発達21.4%
〔参考〕子どもの年齢別/保育園幼稚園に入園の3歳児まで「自分の時間がない」1位、第2子出産の4歳児以降「兄弟児の育児」1位
子どもの食事の悩み/食事19.8%＋離乳食15.8%＝食事関連35.6%　合算で2位
〇保護者向け講座を実施　パパ講座（区内男性保育士　2回　親子遊びや座談会）、助産師講座（4回、離乳食、卒乳、赤ちゃんとの暮らし）、発達講座（医師　2回、子どもの発達、言葉の発達）
〇専門家によるミニ講座を毎月ひろばで実施　（看護師、保育士、消防士）
〇スタッフの相談スキルの向上のための研修「傾聴講座」「相談対応の基本」や「法人スーパーバイザーによる事例検討」等

養育者は慣れない子育ての生活の中で日々成長し変化していく子どもの対応に追われ、不安を抱えていても明確な相談ニーズとして表現できない場合も多い。拠点は、「こんなこと（相談してもいいのかな）と思わずに何でも話して」と常に発信している。会話から相談へとつながり、時には、支援の場へとつながっていくことがある。

1　相談事業の周知
〇【拠点利用者へ向けた取り組み】
・利用者に、拠点ではスタッフによる相談、専門相談、横浜子育てパートナーによる相談や電話相談ができることを丁寧に説明している。
・不安を感じたり、悩んでいることを、どの相談で話せばよいのかを、スタッフが何気ない会話の中でさりげなく案内している。
〇ネットワークを通じた取り組み
・拠点が子育て相談ができる場であることを、あらゆる機会を利用して周知している。広報よこはま鶴見区版に、拠点の専門相談やイベント案内について掲載を開始したことで、子育て世代以外の区民から養育者への声掛けがあり利用につながっている。
・ネットワーク事業を通じて、拠点の居場所事業だけでなく相談事業について広く区全体に伝えている。
・横浜子育てパートナーの出張相談をきっかけに、ひろばでも相談できることを知り、初来所につながっている。

2　ひろば相談
〇【丁寧な相談対応を実施】
・スタッフとの気軽な会話から相談へとつながることが多く、安心して何気なくスタッフと会話できる雰囲気や関係づくりを大切にしている。ひろばやその帰り際、イベント、講座の後などの様々な場面で相談を受けている。スタッフは、相談者に寄り添い、傾聴に努めている。
・イベント予約や問い合わせの電話の際に、丁寧に内容を説明することが電話の動機を聞くことにつながって、適切な相談の紹介や個別相談につながっている。
・相談内容や状況によっては、相談場所や子の見守りなどの環境整備、スタッフの配置を工夫し、安心して相談できる場を作っている。
・妊婦やそのパートナーの来所が増え、情報提供だけでなく、相談につながるケースが増えている。相談が産後へと継続する場合もある。
・父親の来所の増加に伴い、相談も増えている。父親も悩みながら子育てをしている様子が見えてきている。
・付き添いで来所した祖父母との交流も大切にし、家族からも相談しやすい雰囲気を作っている。

〇【相談内容後の検討】
・相談に対して適切な情報提供ができるように、内容の振り返りを行っている。
・法人のミーティング、スーパーバイザーによる検討会、 法人研修、外部研修への積極的な参加等により、すべてのスタッフが相談スキルの向上に努めている。
・スタッフは、専門相談の講師と積極的に交流し、専門知識を得ることで、ひろば相談対応に活用している。

3　専門相談の実施
〇気軽なひろば相談から、より詳しい情報提供につながるように、拠点で専門相談を継続して実施している。拠点の専門相談から区への相談や専門機関による継続的な相談につながる場合もある。
・専門相談（助産師、保育士、看護師、保健師、栄養士、歯科衛生士、 保育・教育コンシェルジュ相談）は、ひろばでの予約不要の気軽な子育て相談として好評を得ている。
・ひとり親等の女性に関する相談に対応するために、NPO法人かながわ女のスペースみずらと連携し、「女性相談」を隔月で実施した。就労中の方も相談できるよう土曜日も設定し、子育て以外の相談ができる場として、離婚等の相談、シングルマザーの相談の入り口としても機能している。
・法人の特性をいかした発達相談を実施した。不安に思うことが多い「発達」に関する相談を、養育者が参加しやすい方法を選べるように、個別相談、ひろば相談、講座の三つの形式で実施した。参加をきっかけに、子どもへの対応を学んだり、適切な専門機関につながっている。
〇離乳食に悩む利用者が多く、区事業（離乳食相談や食育教室、赤ちゃん会）の紹介したり、拠点の助産師講座のテーマに離乳食を採用するなどの対応をとった。拠点が連携する食生活等改善推進委員が主催する乳幼児向けの食育イベントを紹介し、地域で相談する機会につなげた。
〇ひろばで相談が多い離乳食、発達、トイレトレーニング、子どもとの接し方、しつけといった内容でテーマを設定し、身近な学びの場を提供した。助産師による講座（赤ちゃんとの過ごし方や離乳食等）、保育士（トイトレや子どもとの遊び方等）、看護師のミニ講話（子どもの健康に関する情報）、消防士講話（防災、救急救命等）、発達講座（子どもの育ちや言葉等）に、多くの利用者が参加し、熱心に質問する様子が見られた。区主催「子どもに伝わるコミュニケーションのコツ講座」も利用者の関心が高かった。その内容から自分の育児を振り返り、相談へとつながっていく流れがみられている。

4　関係機関との連携
〇【区と連携のため、毎月スタッフミーティングを実施】
区の相談事業などについて理解を深め、利用者への情報提供、相談対応に役立てている。
〇【相談後の継続的な関わり】
・ほとんどの利用者が、相談後も変わらずひろばを利用し、スタッフと継続して交流している。
・利用者支援、横浜子育てサポートシステムの紹介、わっくんひろばとサテライト双方の情報提供を通して、継続的な利用が見られている。
〇【地域連携の深まり】
・横浜子育てパートナーの地域連携の広がりと共に連携先が増えてきている。相談事業を行う関係機関との連携を通して、地域の子育て状況を共有し、相談対応に生かしている（子育て支援者、子育て支えあいネットワーク等）。子育て支援者定例会に横浜子育てパートナーが毎月出席することで、親子がその地域の子育て支援者会場などでも見守られていることが確認できた。それぞれの経験や課題を共有し、お互いの相談対応のスキルアップにもつながっている。

評価の理由（区）

① 区のさまざまな事業の中で、拠点が気軽に相談できる場、各種相談ができる場であること周知した。定例会、スタッフミーティングにて相談事業内容について共有、検討した。スタッフミーティングでは出席者の見直しを行い、相談・情報共有以外にも、知識を深めるためにテーマを設けた話し合いを行うことで、区の事業や対応への理解が深まりスキルアップにつながっている。
② 区で継続支援が必要と思われる相談は、地区担当に直接相談が入り、タイムリーに情報共有、継続支援、必要な機関への繋ぎができている。また、子育て支援者定例会へ拠点が出席できるよう調整したことで、相互の子育て相談の状況や地域情報、個々の相談の共有を行うことができるようになり、これまで以上に情報共有がスムーズになり、相談対応を学び合うことにつながっている。

拠点事業としての成果と課題

（成果）
・敷居が低く間口が広い、ほっとくつろぐことのできるひろばを作ったことで、丁寧な相談対応が継続できている。スタッフのコーディネートにより、養育者のニーズに合った専門相談につなげることができ、子育ての不安の解消につながっている。
・スタッフミーティングなどで区との連携が強化され、相談内容に応じて、相談者にとって必要な支援にスムーズにつなげられるようになった。
・拠点のネットワーク事業や利用者支援事業を通して、様々な鶴見区全体の子育て資源（子育て支援会場、育児支援センター園、親と子のつどいの広場、乳幼児一時預かり事業実施施設を中心に）と連携し、顔の見える関係になっていることにより、養育者をより広く多様な関係機関に繋げていくことができた。それぞれの相談の現場での経験や課題を学びあい、地域全体の相談スキルの向上につながっている。

（課題）
・養育者の現状を整理し、相談の多い内容については関係機関と連携し、ピアサポートを含めた相談対応を検討する。

振り返りの視点

ア　養育者が相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。

イ　どのような相談に対しても傾聴し、相手に寄り添う相談対応を行っているか。

ウ　相談内容の傾向を把握し、振り返りを行い、望ましい対応の検討や共有に努めているか。

エ　区こども家庭支援課との連携のもと、各種専門機関の役割を把握し、養育者への効果的な支援を行うための連携、連絡体制を作っている

オ　専門的対応が必要と考えられる相談について、区こども家庭支援課と相談しながら適切に対応しているか。

カ　関係機関とつながった後にも、役割分担に応じて、継続的な関わりを持っているか。

様式１－３　地域子育て支援拠点事業評価シート

３　情報収集・提供事業

目指す拠点の姿	（参考）2期目振り返りの課題	自己評価（A～D）	
		法人	区
①区内の子育てや子育て支援に関する情報が集約され、養育者や担い手に向けて提供されている。	養育者がもっと自由に情報を提供していくために（有料のイベント情報なども含め）、一定のルール作りが必要と思われる。 ・多様な生活背景を持つ養育者のニーズを把握し、必要な情報を提供していく。 ・情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みづくりをしていく。	A	A
②子育てや子育て支援に関する情報の集約・提供の拠点であることが、区民に認知されている。		A	B
③拠点の情報収集、発信の仕組みに、養育者や担い手が積極的に関わっている。		A	A

評価の理由（法人）

（主なデータ）
〇ホームページアクセス数
総訪問数（年間月平均）
平成29年度　18,838　　平成30年度　23,033　　令和元年度　18,797
ページビュー数（月平均）
平成29年度　33,726　　平成30年度　38,148　　令和元年度　32,963
〇Twitterフォロワー数　201件(令和2年度7月時点）
〇拠点広報誌「わっくんひろばからのおたより」隔月1,500部発行。242か所に配布。
〇親と子のつどいの広場イベントカレンダー、育児支援センター保育園の機関紙、NPOつるみままっぷの発行物を拠点から地域へ242か所に発送。
〇鶴見区全区アンケートより
子育てに関する情報の入手経路
1位：家族、友人、知人　2位：インターネット　3位：拠点のひろば掲示板やスタッフ・・・・10位：わっくんひろばのホームページ
〇拠点利用者アンケートより（令和元年度実施内容）
・わっくんひろばで、子育てに役立つ情報が得られた：わっくんひろば　95%　サテライト95%
・わっくんひろばを利用して、地域の情報（子育てサロン、園庭開放、遊び場等）を知ることができた：わっくんひろば85%　サテライト84%
・わっくんひろばで紹介された情報で、地域の遊び場などに行った：わっくんひろば51%　サテライト65%

区内の子育て資源とのネットワークの充実により多彩な情報を収集することができた。ひろばでは、掲示や配架だけでなく、スタッフが丁寧に聞き取った上で一人一人に合った情報提供に努め、養育者が自分の住む地域を理解したり、自分に合った情報にたどり着けるようにサポートしている。

1　拠点から地域へと広がる情報

〇【拠点の各事業の発信】
・「わっくんひろばからのおたより」（隔月発行の拠点ニュース）は、サテライトが4年目を迎え事業が充実してきたため、イベント情報だけでなく、絵本を借りる、リサイクル品の授受、サークル情報を得るなど様々な目的でのひろば利用を改めて伝えていける紙面に改定した。
・「わっくんひろばってこんなとこ」（拠点の様子を視覚的に伝えるチラシ）を作成し、地域イベントなどで配布し拠点の様子を分かりやすく伝えている。
〇【拠点での情報提供の工夫】
［配架］・預けたい、遊び場を探したい、など目的別に整理したため、情報を求めて迷うことがなくなり、スムーズに収集できるようになった。
・ひとり親サポート横浜、NPO法人みずらとの連携により、多様な背景の養育者に対応した情報提供がしやすくなった。
・国際交流ラウンジとの連携が強化され、外国につながる親子向け情報が充実し、スタッフも案内しやすくなった。日本語を学びたい外国につながる養育者へボランティア日本語教室などの紹介ができ、関係を生かした情報収集提供ができている。
［掲示］・主に地域別に整理した。地域分けは「つるみ区子育て応援ガイドブック」（鶴見区発行）と同様にしたため、ひろば掲示とリンクさせ詳しい情報が収集でき、地域の遊び場を紹介しやすくなった。
［配布物］・初来所の妊婦とそのパートナーに向け、関係機関や区、拠点のチラシ、民間団体の情報などをひとまとめにセットし、渡している。そのため妊婦がひろば内を歩き回らなくても必要な情報が一括で収集できている。同封されているチラシなどを見ながら、スタッフとの会話を通して、自分に合った情報を得ることができる。
・転入者や初来所者には、「つるみ区子育て応援ガイドブック」を積極的に配布。令和元年より編集に参加し、子育てサークルの紹介など養育者と担い手のニーズを反映できるようになった。

〇【地域と養育者をつなぐ】
・ネットワークの充実により、情報が幅広く収集できるようになったので、養育者は、拠点の情報とスタッフとの会話で、それぞれに合った遊び場や子育て支援の場を知り、出向けるようになった。利用者アンケートにもその成果が表れている。
　情報が収集できる機関の例：地域ケアプラザ、地区センター、図書館、親と子のやつどいの広場、乳幼児一時預かり事業、育児支援センター保育園、子育てサロン区内５１か所、子育て支援者会場等）
・中でも、保育園の園庭開放の情報は、保育園の子育て支援事業の周知に役立っており、外遊びはじめなどのきっかけになっている。
・子育てサロンについては、取材に行き、担い手との関係を深めながら情報収集をしているため、それぞれの特徴なども伝えられ、スタッフが養育者のニーズに合わせた情報提供ができる。ホームページにもそれぞれのページがあり、随時更新している。
〇【拠点からの発信】拠点ホームページのリニューアル
IT世代の養育者の要望に対応できるよう、ホームページでも鶴見区内の子育て情報をできるだけ提供できるよう枠組みを作った。
・地域別子育てカレンダー新設：関係機関が、自身が主催するイベントを各自で入力、更新できるようにし、タイムリーな情報提供が可能になった。
・「いろいろな言語」ページの新設：鶴見国際交流ラウンジの協力で、ひろばの案内を6か国語版を掲載。外国につながる親子への情報提供を強化した。
・Twitterを開設(令和2年5月末）：多くの人の目に留まるようホームページのトップ画面に配置。開設直後からフォロワーが増え、インターネットで情報収集をする世代に対応し、拠点のタイムリーな情報発信に役立っている。

様式１－３　地域子育て支援拠点事業評価シート

〇【拠点以外の場所でも情報に出会えるようにするために】
・拠点以外の子育て支援の場でも、養育者へ情報提供ができるように、様々な担い手や関係機関へ向けて情報提供を行った。
　例：母親学級、こんにちは赤ちゃん訪問（訪問員に資料提供）、赤ちゃん会、子育て支援者会場、子育て支援者定例会、子育てサロン、産婦人科などの病院、育児支援イベントなど。
　これにより、妊娠期から幼児までが、様々な場所で多くの情報が得られるようになった。
・子育て支援者定例会で、支援の場で必要とされる情報を共有し、子育て支援者を通して拠点から遠い地域の養育者に情報が提供できている。
・子育てサロンには、地域の子育て情報をまとめた情報ファイルを提供、毎年更新し、拠点と同等の情報提供ができるようにした。
・育児支援イベント（区内7地区で保育園が実施）では、こどもとの遊び方など必要とされる情報を検討し、保育士と共に情報提供している。

2　区民への認知の強化
〇「わっくんひろばからのおたより」の新規配布先を開拓している。例：地域の産婦人科、生活協同組合、障がい者地域活動ホームなど。特に、図書館での配架を充実させたことで多くの区民への周知が広がっている。
〇拠点から遠い地域の大型商業施設での周知活動（「わっくんひろばからのおたより」掲示、配架、子ども向けイベントでの情報提供、出張相談）により、より広域で周知ができている。
〇区内の大きなイベント（三ツ池フェスティバル、臨海フェスティバル、子育て個育ちフォーラム、育児支援イベント）で拠点をはじめとする子育て支援情報の提供に努め、区内広域で、幅広い世代に向けて周知を行うことができている。（令和元年度　チラシ配布1250枚）

3養育者による情報提供と発信
〇「ママのための掲示板　わっくんママコミュニティ」（ひろば設置）のルールを作成。営利目的を避け、ひろば経由での連絡先交換などにより、気軽に安心な情報発信に配慮でき、おゆずり品授受、利用者主催イベントなどの情報提供が活発になってきた。
〇養育者や区民から提供された民間の子育て情報ファイル作成。養育者が安心して利用できるようルールを作ったうえで、ひろばで自由に閲覧できるようにした。それにより、養育者は、参加費有料イベントを含め、様々な子育て情報を得られるようになった。
〇子育てサークルの周知活動に協力している。令和元年度から「つるみ区子育て応援ガイドブック」への掲載により、広域で周知されている。
〇利用者から幼稚園情報を収集しファイルにして掲示している。毎年、先輩から現役利用者へ情報伝達される仕組みができ、幼稚園選びに役立っている。
〇養育者のボランティアグループから始まったNPO法人つるみままっぷの情報収集提供活動をサポートしている。
　・養育者目線で作成された鶴見区内の地図をひろばで配架。利用者への地域の案内に生かし、活動も紹介。
　・つるみままっぷが独自に情報収集し作成した幼稚園情報誌の周知、頒布に協力している。
　・「つるみ区子育て応援ガイドブック」の編集、校正で協力を依頼した。地図作成で培った実績を生かして、拠点と共に区のガイドブック作成事業に関わっている。幼稚園情報などが養育者が欲しい情報に近づいた。

評価の理由（区）

①地域別に子育て情報を発信するため拠点ホームページ、区子育て情報誌「つるみ区子育て応援ガイドブック」の情報をすり合わせながら作成をし地域の養育者に生活圏の身近な情報を提供する仕組みをつくることができた。また、横浜子育てパートナーが養育者とともに園庭開放に出向き、地域の情報を発信することに加え各保育園とも情報共有した。
②子育てネットワーク会議や区の事業・広報を活用して拠点が子育て情報に関する情報集約・提供する役割があることの周知に努めたことで外部から拠点へ子育て情報が集まり、会議等で区内の子育て課題をみつけ解決に向けて他機関と相談する関係性をつくった。
③情報掲示板「わっくんママコミュニティ」の活用やNPOつるみままっぷと協働し情報発信に関わる仕組みの構築ができてきている。協働のなかで担い手が養育者の目線に立って情報を発信することで発信の方法も検討し媒体もみやすく工夫できた。

拠点事業としての成果と課題

（成果）
・紙媒体以外で発信できる環境を整備することにより、より多くの養育者に情報提供する仕組みができた。
・区全体の子育て支援ネットワーク構築により、情報の収集、提供先が拡大し、養育者へ提供できている。併せて拠点が子育て支援の情報集約、提供の中心であることが認知されてきた。
・拠点内の掲示から始まり、子育てサークルの情報提供のサポート、NPOのガイドブック作成への参加まで、様々な側面で養育者が情報収集、提供に関わる仕組みができてきた。
（課題）
・紙ベースの情報は届けられる範囲に限界があるため、情報が十分に発信できていない現状がある。より多くの養育者に情報提供をするために、ホームページやTwitter等SNSを利用した更なる情報発信に取り組む。

振り返りの視点

ア　養育者や担い手が必要としている情報が何かをとらえ、区内の幅広い地域の子育てや子育て支援情報を収集・提供しているか。
イ　来所が困難な養育者や担い手も含め、情報を入手しやすいよう、さまざまな媒体や拠点以外の場を通して情報発信しているか。
ウ　利用者が情報を入手しやすく、自ら選べるひろば内の工夫をしているか。
エ　さまざまな子育て支援の場に出向いて収集した具体的な情報や、関係機関及びネットワークを通じて得た情報を養育者や担い手に提供しているか。
オ　拠点の情報収集・提供機能を幅広く区民に周知しているか。
カ　養育者や担い手から拠点に情報が届けられる仕組みや工夫があるか。
キ　情報収集・提供の企画に養育者や担い手が関わる仕組みや工夫があるか。

様式１－４　地域子育て支援拠点事業評価シート

４　ネットワーク事業

目指す拠点の姿	（参考）2期目振り返りの課題	自己評価（A～D）	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するためのネットワークを構築・推進している。	（課題） ・拠点と個々の関係機関とのつながりは構築されてきたため、次期は拠点を中心とした区全体の関係機関のネットワーク構築が課題である。	A	A
②ネットワークを活かして、拠点利用者を地域へつないでいる。		A	B

評価の理由（法人）

（主なデータ）
〇実施したネットワーク会議(令和元年度実績)　**※ネットワーク事業資料1　ネットワーク関係図参照**
・つるみ子育て支え合いネットワーク会議：7団体
・つるみ・ふらっとる一むネットワーク会議：子育てサロン50団体所属。（21団体参加）
・鶴見区子育て支援ネットワーク会議：31団体
〇実施した鶴見区子育て支援ワークショップ
・平成31年1月　　プレ開催　鶴見区の現状をふまえた、発達障害の親子サポート 「気になる子」に寄り添う／講師:地域活動ホーム幹
・平成31年3月　　第1回「鶴見区における　外国に関わる親子の現状について」／講師：鶴見国際交流ラウンジ
・令和元年11月　　第2回「バルーンアート講習会」／講師：つるみ区民活動センター、ボランティア団体
・令和2年1月　　第3回「外国につながる親子について語り合おう」／講師：鶴見国際交流ラウンジ、ボランティア
〇鶴見区子育て支援拠点NEWSを年1回発行、関係機関に送付

※用語について　「鶴見区子育て支援ネットワーク」を全体ネットワーク、「鶴見子育て支え合いネットワーク」を含む4つのネットワークを部分ネットワークと表記する。

「鶴見区の親子のだれもが安心して過ごせる居場所を持ち相談できる相手を持つ」を目標に、区全体のネットワークの構築に取り組んだ。従来の部分ネットワークのつながりを生かし区全体のネットワークを構成し、区全体で子育て支援の課題を共有する仕組みづくりに取り組んだ。具体的には、現場で感じる課題を部分ネットワークの会議で話し合い、鶴見区子育て支援ネットワークの会議で共有した。その課題解決のために、ネットワークメンバーを中心とした学びの場としてのワークショップを位置づけている。

1 【部分ネットワークの充実】

〇つるみ子育て支え合いネットワーク
常設の場を持つ団体が、区内の子育ての課題を共有する重要な場として機能している。課題の共有、運営の情報交換を目的に、年1回ネットワーク会議を開催（平成24年開始）している。会議以外でも、相互見学会開催、必要に応じた情報交換、提供を実施し、互いが助け合える関係を築いてきた。新規事業所が参加した時には、運営のノウハウを伝えた。また、令和元年度は、拠点で見えてきた子育て支援の課題を本ネットワークでも話し合い、区全体の現状を把握するため鶴見区子育て支援ネットワーク会議で共有した。

〇つるみふらっとる一む(子育てサロン）ネットワーク
・「鶴見区の親子のだれもが安心して過ごせる居場所を持ち相談できる相手を持つ」という目的に向けて、親子が徒歩圏で利用できる区内51か所の子育てサロンの活性化に向けて支援している。担い手が子育てサロンを親子の居場所的な役割だけでなく、子育て支援の情報を得る場所、相談ができる場所として利用できるように、「子育て支援情報ファイル」の配布、横浜子育てパートナーの出張相談、横浜子育てサポートシステムの出張入会説明会を実施した。
・平成30年度よりつるみふらっとる一むネットワーク会議を年1回開催し、情報交換を行い、サロン同士のネットワーク強化を図っている。会議では各々のふらっとる一むが顔の見える関係になり、日々の活動を共有し担い手がつながる場となった。

〇育児支援センター保育園とのネットワーク
育児支援センター保育園と年1回会議（平成24年開始）を開催し、現場での気づきを情報交換し、子どもにとって必要なこと、養育者のニーズについて、話し合いを続けてきた。その成果を拠点事業（保育士相談、保育士講話）、育児支援センター園からの情報提供に生かしている。
〇保育園とのネットワーク
全保育園が参加して開催される育児支援イベント（区内8地区で実施）に参画している。平成30年度は拠点から遠い駒岡地区の幹事園を務め、園との交流が進み地区での子育て支援事業の周知を強化できた。令和元年以降は幹事会に参加し、企画段階から参画することで、拠点やネットワークから得た気づきを伝え、養育者に役立つイベント実施に役立ててもらっている。イベント当日は、子育てサロンなどの支援情報の提供、横浜子育てサポートシステム入会説明会、横浜子育てパートナーによる相談を実施し、拠点から遠い地域での情報提供を行っている。

〇障害に関わるネットワーク作り
平成30年度、地域活動ホーム、障害児地域自主訓練会メンバーで試行的にネットワーク会議を開催し、訓練会の利用者が減少傾向であることを知り、その周知をサポートした。関係機関と顔の見える関係ができたことで、令和元年度は、スタッフの訓練会見学や子育てサポートシステムの会員向け研修の実施ができ、スタッフや会員にとって大きな学びとなった。地域活動ホームや東部地域療育センターとも関係ができ、これらの交流が拠点事業に役立っている。（障害関連の情報提供の仕方、相談対応、横浜子育てサポートシステムの活動支援）。発達に心配を抱えた親子を多くの区民や機関が協力し合って支援できるように、今後、これらの関係をピアサポートに向けたネットワークづくりへと発展させていく。

2 【他機関・団体とのネットワーク】

〇子育て支援者定例会
子育て支援者（区内12会場、週1回）定例会に毎月出席することで、各地区の親子の様子を情報交換し、利用者のニーズに寄り添った情報の提供が可能となった。各会場の相談のなかから地域の現状を共有し、課題を見出す場となっている。子育てサークル支援も共に実施し、地域の特徴を知る機会となった。

〇要保護児童対策地域協議会、地区別こども虐待防止連絡会に参加し、拠点の役割だけではなく、ネットワークから見えてきた区内の子育ての現状も報告し、関係機関と顔の見える関係をつくっている。
〇鶴見・あいねっと（鶴見区地域福祉保健計画）推進委員会、第4期計画策定検討プロジェクトに参加し、子育て支援の重要性について伝えている。
〇主任児童委員連絡会を年1回、拠点で実施している。拠点の様子を具体的に知ってもらい、課題を情報提供できている。
〇NPO法人つるみままっぷとの連携
・NPO法人つるみままっぷ（養育者の目線で作成した地図「ままっぷ」の日本語版、中国語版、英語版、幼稚園ガイドブックを発行する現役の母親グループ）と連携して様々な事業（発行物の地域への送付、背守りの会、等）の開催をサポートすることで、養育者の想いを拠点事業を通して区民に届けることができた。また、代表者が、鶴見区子育て支援ネットワーク会議に参加し、その活動の周知につながった。
〇つるみ子育て個育ちフォーラム運営委員会（乳幼児から思春期までの子育て支援や青少年健全育成に関わっている団体で、区も参画する会。年1回のフォーラムは20回目を迎える）に参加している。多くの民間団体と交流しながら、準備を進め（周知協力など）、当日は子育て支援情報の提供、子育てサポートシステムの入会説明会を実施している。フォーラムで得た情報を拠点からも鶴見区子育て支援ネットワーク会議等で伝えている。

3 【全体ネットワーク　鶴見区子育て支援ネットワーク会議の開催】
区全体のネットワーク構築のため、公共、民間団体を含めた子育て支援に関わる様々な機関に協力を求め、全体会議「鶴見区子育て支援ネットワーク会議」を開催した。
〇平成30年　第1回鶴見区子育て支援ネットワーク会議　（27団体参加）
・事業の紹介を通して顔の見える関係づくりに努め、参加者が、区内に様々な子育て支援の場があることを再確認する機会となった。
・会議で見えてきた課題について、各機関の強みを生かし学びあう場としてワークショップを実施することを決めた。実施したワークショップでは、ネットワーク会議を構成する機関内で講師を選出し、発達障害の親子のサポート、外国につながる親子の現状について学び合い、担い手がそれぞれの現場でできることを確認し合った。
〇令和元年　第2回鶴見区子育て支援ネットワーク会議　（31団体参加）
・事業紹介、部分ネットワーク会議からの報告も実施し、子育て支えあいネットワークから「一時預かりの不足」について報告し、それを受けての意見交換、情報交換が行われた。会議後、区との定例会で協議を続け、まずは区内の一時預かりに関する現状を把握する必要性を認識できた。
・外国につながる親子について、当事者を交えて語り合う場をワークショップで提供し、それぞれの現場での課題を確認した。

4 【養育者とネットワークをつなぐ】
拠点で受けとめてきた養育者の声を全体および部分ネットワークに届けることができるようになった。区全体の課題として多くの関係機関と共有し、ワークショップでそれを学びあうことで、解決の糸口を探る流れも見えてきた。
・ネットワークを通して、多くの子育て支援情報を得ることができ、顔の見える関係から得た生きた情報として、分かりやすく拠点の利用者に情報提供し、各支援の利用に繋がっている。（子育て支援者会場、子育てサロン、保育園の子育て支援事業、障害児地域自主訓練会等、詳細は情報収集提供事業へ）
・民間団体とのネットワークが充実し、子育て支援活動に関心のある養育者や区民に、子育てサロンやNPO等の活動を紹介し、スムーズにつなぐことができている。
・ネットワーク事業の活動で得た情報を、鶴見区子育て支援拠点NEWSとして発行し、広く関係機関と共有している。

評価の理由（区）

①部分ネットワーク（つるみ子育て支え合いネットワーク、他）が横のつながりをもつために全体ネットワークを構築し、鶴見区子育て支援ネットワーク会議を開催したことで、区内の子育て状況を確認し、一時預かり等に関する課題を共有できた。今後は従来からつながりのあった部分ネットワークやワークショップも活かしながら、課題解決のために必要な関係者がつながり、話し合いを進めていく必要がある。
②ふらっとる一む（子育てサロン）、子育て支援者等とのつながりや会議を生かし、養育者や地域の状況を把握できたことで、新たに、養育者を拠点から地域の子育て支援の場につなぐことができた。また、拠点が養育者の立場になって情報を発信したことで、養育者自身が地域の子育て支援活動にも参加できるようになった。今後は子育て支援の関係者が協力しながら区内の子育てに関わることで、支援の力を集約して活動に活かしていくことができるようにしていく。

拠点事業としての成果と課題

（成果）
・区全体のネットワークを構築し鶴見区子育て支援ネットワーク会議を毎年開催することができ、区全体の課題の共有の場となった。さらにネットワークの力を借りて、ワークショップを定期開催し、課題解決に向けて学びあい、交流を深めていく仕組みを作った。
・1期目から培ってきた部分ネットワークが充実し、様々な事業での連携が進み、親交が深まったことで、互いが助け合う関係ができている。
・拠点のひろばで養育者と話しながら見えてきた子育ての現状や課題を、部分ネットワークで意見交換して確認し、鶴見区子育て支援ネットワーク会議において提言することで、養育者の声を、ネットワークに届けることができるようになった。一時保育の場の不足に関しては、区の定例会で協議を続けることができた。
・民間団体とのネットワークが充実し、子育て支援に関心のある方にそのニーズに合った様々な活動を紹介することが可能になった。また、子育て支援に尽力する民間団体が鶴見区子育て支援ネットワーク会議に参加し、担い手の声を届けることができるようになった。
（課題）
・今後も、活動の現場で見えてきた課題や区が把握している子育ての課題を積極的に鶴見区子育て支援ネットワークへ届け、それを共有し解決に向けて取り組んでいく。（例：一時預かりの不足、障害に関わるネットワーク作り）　また、拠点として何ができるかを区と共に検討し続けていく。
・孤立しやすい環境の養育者が身近な場所で子育ての支援を利用できるように、地域に出向いて出張相談会を開催したり、地域の子育

振り返りの視点

ア　子育て家庭や地域の子育て支援関係者のニーズを踏まえ、連携促進に取り組んでいるか。
イ　地域の子育て支援関係者が、互いに知り合い、理解し、子育て家庭の状況及び子育て支援の情報や課題を共有するための場、機会をつくりだしている
ウ　地域の子育て支援関係者が協力し、支え合えるように、関係者同士をつないでいるか。
エ　養育者を身近な地域の子育て支援の場につなげているか。
オ　子育て支援活動に関心のある方を丁寧に受け止め、必要に応じて身近な地域の活動へつないでいるか。

様式１－５　地域子育て支援拠点事業評価シート

５　人材育成・活動支援事業

目指す拠点の姿	（参考）2期目振り返りの課題	自己評価（A～D）	
		法人	区
①地域の子育て支援活動を活性化するため、担い手を支えることができている。	●子育てサロンの課題の把握・共有を区全体で進める。 ●サークルの支援を区中心から拠点中心へ移行し、ネットワークを活用してサークル支援を協働ですすめていく。 ●拠点の利用者が、様々な拠点の運営に協力してもらえる工夫をする。利用者がボランティア活動に参加できるきっかけ作り（ひろばの外国語ボランティアなど）。	A	A
②養育者に対して地域活動の大切さを伝えるとともに、地域の子育て支援活動に関心のある人が、活動に参加するきっかけを作っている。		B	B
③広く市民に対して、子育て家庭を温かく見守る地域全体での雰囲気づくりに取り組んでいる。		A	B
④これから子育て当事者となる市民に対して、子育てについて考え、学び合えるように働きかけている。		A	A

評価の理由（法人）

（主なデータ）
・つるみ・ふらっとる一むネットワーク会議（平成31年7月/令和元年7月）、鶴見子育て支援ワークショップ（平成31年3月/令和元年11月/令和2年1月）、ふらっとる一む通信　年2回発行（第4号発行済）。
・わっくんボランティア登録人数（通算72名）（平成30度以降28名が中心となり活動中）　活動実績（平成30年度8件（参加者5名）/令和元年度21件参加者7名）
・わっくん託児サポーター　登録人数（23名：令和元年度）　活動実績（9件：令和元年度）
・子育てサークル数(13)　新規サークル立ち上げサポート（2）（令和2年4月現在）
・平成30から令和元年度の学生実習受入れ（62名：横浜実践看護専門学校、関東学院大学教育学部　他4校）
・学生ボランティア受け入れ（18名：市立東高等学校、鎌倉女子大学）（令和元年度）

ふらっとる一む（子育てサロン）が、サロン同士のネットワークづくりを進め、互いが情報交換しながら、やりがいをもって活動できるよう支援した。
養育者支援としては、子育てサークル支援を積極的に行い、運営のノウハウを構築し、新規サークルの立ち上げなどをサポートした。拠点内でも様々な形でボランティアが活躍している。

1【担い手を支える活動】
〇ふらっとる一む（子育てサロン）の担い手を支える活動
・周知の支援を実施し（拠点ホームページへの掲載、拠点や地域での情報提供など）、積極的に情報提供を行ったことで、養育者を身近な居場所へつなぐことができている。
・ふらっとる一むアンケート(年1回)を実施し、活動状況の把握に努めている。ニーズのある子育てサロンには訪問して現状を把握し、下記会議や通信を利用して、課題解決のサポートを行っている。アンケートを通じて、子育てサポートシステム出張入会説明会や横浜子育てパートナーの出張相談を提案、実施し、子育てサロンの活性化をサポートしている。
・つるみ・ふらっとる一むネットワーク会議を開催し、子育てサロン同士が横のつながりを持ち、課題を話し合い、解決方法について情報交換を行った。イベント実施での課題も見えてきたため、「鶴見子育て支援ワークショップ」や出張講座「担い手さんのためのかんたん工作ミニミニ講座」を開催し、活動のバックアップを行った。
・子育てサロン代表者2名が鶴見区子育て支援ネットワーク会議に出席し、報告を行うことで、今までの歩み、活動の意義、課題について様々な子育て支援機関に伝えることができた。
・上記の活動報告、運営に役立つ情報を伝えるために、ふらっとる一む通信を年２回発行し、全ての担い手に情報を届けている。

2【養育者や区民のボランティア活動を支援】
〇地域で活動する子育てサークルの支援
・支援行事として、「地区別交流会」（サークルで使える遊びや情報を伝え、近隣のサークル同士の交流を促す会）を年3回、「サークル全体交流会」(サークル運営について共に考える会)を年1回を子育て支援者と共に実施し、活動をバックアップしている。会を通して見えてきた課題に対応するために、過去の交流会での意見交換、アンケート結果、子育て支援者との話し合いなどを取りまとめ、運営のノウハウを集約した資料を作成した。また、養育者が活動に負担を感じ会員が減少する中で、サークルの意義とは何かについて、全体交流会でのワークショップでテーマとして取り上げ、支援者と養育者が語り合い、様々な気づきを得た。
・会員募集や周知活動を支援するため、「サークルフェア」を開催し、区広報誌にも掲載。紹介ポスターの掲示や、サークルメンバーによる説明会をひろばで実施し、養育者へ向けて積極的に周知を行った。「鶴見区子育て応援ガイドブック」にもサークル情報を掲載した。
・新規サークルの立ち上げ支援として、養育者が立ち上げた1歳児サークル「ひまわりくらぶ」のサークル化及びその後のサポート、多胎子育てグループ「リトルツインズ」のサークル化及び運営のサポートを行った。
・拠点や支援者会場で日頃からサークルリーダーと交流を図り、情報提供や運営に関する相談対応を実施することで継続的な支援を行っている。
〇拠点で活躍するボランティア
・継続的に「わっくんボランティア」の募集を行うことで、地域の方や拠点の元利用者がメンバーとなり、ひろばやイベント中の子どもの見守り、イベントでの情報提供などで活躍している。また、地域のボランティアが講師となり「読み聞かせ」「手遊びわらべうたの会」「ベビーマッサージ」「赤ちゃん体操とママビクス」「おもちゃドクター」といった、様々な拠点イベントが実施されている。
・有償ボランティア「わっくん託児サポーター」を募集し、メンバーが子育てサポートシステム入会説明会やイベントで、子の見守り活動を行っている。これらの活動をきっかけに子育てサポートシステムの提供会員に登録、活動に繋がるなど、拠点のひろばやイベントが、他の地域活動へ参加のきっかけの場となっている。
〇国際交流ラウンジと横浜市国際交流協会と共に企画し実施した、外国につながる親子向けイベント「おやこにほんごタイム」では、利用者や元利用者が講師や手あそびのボランティアとして参加し、会の中心的な役割を果たした。参加者の減少から、会は休止しているが、ボランティアが通訳などとして、イベント以外でも日常的にひろばで活躍できる場、当事者自身もボランティア活動に参加できるような仕組みを検討している。
〇養育者中心で開催するイベントの実施
・ひろばイベント「うたごえわっくん」は、養育者自身が自主的に会の運営を行っている。イベントを見る親子の喜ぶ様子が参加者のモチベーションにつながり、仲間作りや自己表現の場となっている。

・養育者がイベント（ちっちゃな読み聞かせ）の読み手として参加し、継続的に活動している。
・「ひだまりんの会」は、養育者が中心となって会を運営し、未熟児の保護者と先輩ママとの交流、情報交換の場として定着している。
・利用者のイベント企画、実施に協力。実施場所の紹介、チラシの掲示及びひろばでの周知を行った。

〇鶴見区子育て支援ワークショップ第3回「外国につながる親子について語り合おう」に於いて、利用者が当事者ボランティアとして自身の体験を語る場をつくった。

〇地域から拠点へ、拠点から地域へと、ボランティア活動が広がっている。
・馬場地域ケアプラザの子育て支援事業への協力依頼に際し、拠点の手遊びわらべうたの会メンバーを推薦し、イベントの実施につながった。
・地域で活動するボランティアや、区民活動センターより紹介を受けたサークル「バルーンソレイユ」メンバーが、イベント時の飾りつけやひろばで作品の配布等を行い、好評を得ている（不定期）。地域のボランティアの活動の場が拠点にも広がり、活躍してもらう機会が増えている。

3【子育て家庭を温かく見守る地域】
〇近隣地域の住民や子どもたちとの交流を図っている。
・地域住民と共に子育て家庭を見守る関係性を築くため、地域の防災訓練（豊岡小学校）に毎年参加している。
・豊岡小学校2年生生活科の学習「まちたんけん」に協力した。以前利用していた子どもたちも多く参加しており、学習発表会では、ひろばで遊んだ日々の思い出やその頃の母親の気持ちなどを想う様子が発表され、スタッフにとって拠点の意味について考える時間となった。
〇企業実習の受け入れ
・地域の一員として子育てをサポートしたいという企業の支援を目的とし、NPO法人び一のび一のと共に、「東宝タクシー㈱」子育てタクシードライバー実習の受け入れを行った。ドライバーがひろばで親子とふれあうことで、子育て中の親子への理解を深めてもらうことができた。
〇NPOつるみままっぷの背守りの会をサポートし、地域の孫育て世代のボランティアと利用者、プレママ、プレパパとの交流が生まれている。また、地域の企業と同NPOが協力して出産祝いを送るウェルカムベビープロジェクト事業に協力している。
〇鶴見区区政推進課主催「鶴見まちづくりゼミナール」の町歩き講座参加者（約30名）の施設見学受け入れに協力した。一般の区民を広く受け入れることで、拠点の周知を図ることが出来た。

4【若い世代と共に子育てを考える活動】
〇妊娠期の利用者が、これからの子育てについて考える取り組みとして、イベント「こうのとりくらぶ」を行っている。中でも「背守りの会」及び「ベビーマッサージの見学」の回では、これから子育て当事者となる妊娠期の利用者と子育て中の利用者の触れ合いが、子育てについて共に考え、学び合うきっかけの場となっている。
〇学生研修・学生ボランティア
・ひろばの見守りボランティアとして、若い世代が親子とふれあうことで、地域の子育てを知り、子育て支援について学ぶ機会を得ている。
・イベント「おもちゃドクター」には横浜市立東高等学校の生徒がお手伝いボランティアとして、講師と共におもちゃの修理作業に熱心に取り組み、地域住民、学生、親子の多様な交流が生まれている。
・看護学生や大学生の研修、施設見学及び利用者への聞き取りなどの受け入れを行い、学生が利用者の様子や子育て支援について理解を深める場として活用されている。
〇研究協力
・横浜市立大学　国際総合科学科　三輪研究室　「妊娠期と現在の親子の移住地域とのつながりや行動圏におけるアンケート調査」に協力し、その結果を共有した。区の特徴も確認できた。

評価の理由（区）

①ふらっとる一む（子育てサロン）とのつながりを強化し連絡会やアンケートで情報交換をし、サロンの担い手支援を充実させることができた。
②拠点を中心に子育て支援者と協力して子育てサークル支援を実施することができた。サークルの情報が集約され、まだサークルに入っていない養育者にも情報を伝える仕組みづくりができた。また、ひろばへの掲示、関係機関へのチラシを配布し周知を通してわっくんボランティアを募集し地域で子育て支援に関わる人が増えるようにした。
③近隣地域の行事への参加を通して住民、小学生との交流を図るなかで子育ての現状や支援の必要性を周知することができた。地域全体で妊娠期から子育て家庭を温かく見守る雰囲気づくりを目指して今後も取り組んでいく。
④区の両親教室で地域の子育て支援施設の一つである拠点の事業を紹介し、妊娠期からの見学につなげた。また、区内の学生ボランティア、実習生を迎え、子育てに関する調査に協力し子育て支援の現状について理解を深める場としている。

拠点事業としての成果と課題

（成果）
・子育てサロン支援が充実した。アンケートによる課題の把握、ネットワーク会議による区全体の課題共有が可能となった。
・子育てサークルの支援を区中心から拠点中心へ移行し、子育て支援者と共に充実した活動を行い、支援のノウハウを構築できた。
・養育者が、様々な拠点イベントで活躍している。また、元利用者や地域の方がボランティアとして登録し、様々なイベントをサポートしている。活動を通して、地域の活動へとつながる姿も見られている。
（課題）
・様々な状況の中で変化していく子育てサロン、子育てサークルなどの活動状況を随時把握し、担い手たちのニーズに合った支援をしていく。
・拠点が、当事者を支援するだけでなく、当事者自身が持てる力を生かして活躍する機会をともに作っていく。
例：外国につながる利用者（当事者）が、ひろばで外国語ボランティアとして活動し、利用者同士がつながっていけるようなボランティア活動を実施する。

振り返りの視点

ア　子育て家庭や担い手のニーズを踏まえ、活動意欲の向上やスキルアップにつながる取組がなされているか。
イ　地域の子育て支援活動がより充実されるよう、必要に応じて新たな活動希望者を結び付けているか。
ウ　新たな担い手を発掘・養成する取組がなされているか。
エ　活動希望を丁寧に受け止め、拠点内の活動や身近な子育て支援活動等に結び付けているか。
オ　養育者が地域を身近に感じ、地域の活動に関心を持てるように働きかけているか。
カ　地域で子育て支援に関わる人が増えているか。
キ　子育ての現状や子育て支援の必要性を周知・啓発しているか。
ク　子育て家庭（妊娠期の方を含む）を温かく見る気持ちを持つことができるように働きかけているか。
ケ　これから子育て当事者となる市民と子育て中の親子がふれあい、学び合う機会や場を作っているか。

様式１－６　地域子育て支援拠点事業評価シート

６　横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業

目指す拠点の姿	（参考）1期目振り返りの課題	自己評価（A～D）	
		法人	区
①子育てサポートシステムに、多くの区民の参画が得られている。	・依頼理由を分析し、リフレッシュのための利用を促進し、理由の如何にかかわらず依頼できることをさらに広く手厚くPRする。 ・周知をさらに広げ、提供会員の獲得に努めていく。	B	A
②養育者にとって、必要な時に利用しやすい事業となっている。		A	A
③会員が地域の支え合いの良さ、大切さを理解しながら、利用や活動を継続できるように、支えることが出来ている。		A	A
④養育者の利用相談内容に応じて、子育て相談や他機関等の情報を提供し、必要な支援につなげている。		A	B

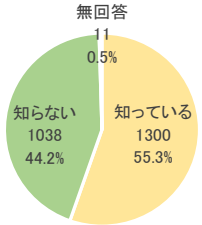
評価の理由（法人）

（主なデータ）

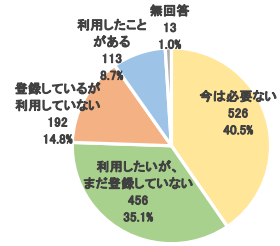
		平成29年度	平成30年度	令和元年度
1	利用会員登録者(外国人家庭登録者)/人	809	948	1,012(46)
2	提供会員登録者(外国人家庭登録者)/人	125	133	130(0)
3	両方会員登録者(外国人家庭登録者)/人	53	59	53(0)
4	事前打合せ/件	162	231	242
5	ひろば預かり/件	120	175	298
6	活動/件	3,600	3,529	3,821
7	リフレッシュのための利用活動/件	212	177	346
8	周知のためのチラシ配布/枚	58,050	35,100	55,030

令和元年度全区アンケート

横浜子育てサポートシステムの認知



横浜子育てサポートシステムの利用経験



サテライトの開所に伴い、区内全域で周知活動が活発に行えるようになってきた。ネットワークの充実により、活動へ理解が広がっている。これを提供会員拡大につなげていくことが今後の課題である。

1　地域への周知活動

〇区と連携、協力して、以下の周知活動を行った。

・事業の説明、会員の募集、入会説明会の案内及びPRを継続的に行った。（保育園、小中学校、学童保育、子育て支援関連の会議、地域の掲示板、全戸回覧、三ツ池フェスティバル、臨海フェスティバル等）　チラシ配布は、学校関係と地域回覧・掲示を隔年で交互に実施した。

・新たに令和元年度より多くの区民が目にする、広報よこはま鶴見区版に毎月会員募集記事等を掲載した。

・区役所、駅連絡通路、商業施設へも掲示を継続した。

〇拠点のネットワークの広がりから、活動への理解が深まった。

・提供会員獲得への活動としては、子育て支援者、主任児童委員、こんにちは赤ちゃん訪問員、子育てサークル関係者などの養育者、近隣の町内会へ向けて周知活動を継続した。

・子育て支援者は、毎月の定例会に拠点スタッフが参加できるようになったことで、より丁寧に活動の紹介を行うことができ、活動への理解が深まり、周知活動への協力が得られている。（幼稚園入園予定の保護者へ声かけし、提供会員としての活動を周知、支援者本人が提供会員として登録）

・主任児童委員への周知は、定例会に出席し、地区別の会員の偏り、それによる活動数の差などを報告し、新会員獲得PRに協力を得られた。

・親と子のつどいの広場では、スタッフが提供会員になり、ひろばでの預かり活動が盛んになった。

〇拠点ホームページに掲載、区役所、での掲示も継続的に行った。ホームページのリニューアルにより、横浜子育てサポートシステムの情報をわかりやすく伝えることができるようになった。

〇横浜子育てパートナーと連携し、名刺型カードを作成することにより、相談と預かりの相互のニーズに応える情報提供ができるようになった。また、横浜子育てパートナーの周知と同時に子育てサポートシステムのPRができるようになり、周知活動が拡大した。（両親教室、こんにちは赤ちゃん訪問、等多数）

〇令和元年度実施の全区アンケート結果では利用会員がいる学齢期が入っていないためもあると考えられるが、横浜子育てサポートシステムの認知度は、55.3%だった。これまでの周知先の他に今後は妊産婦への周知を広げて行く事で、認知度向上を目指したい。また、「知っている」の中で、「利用したいが、まだ、登録していない」が35.1%あったことから、利用促進のため登録までの入会説明会の参加やその後の書類作成等、養育者のわずらわしさを少しでも軽減する工夫を個人の状況に合わせて実施した。

2　養育者のニーズに寄り添って

〇区と連携して、子育て支援者会場(令和元年度全会場入会説明会実施を計画し、ほぼ達成)で出張入会説明会を開催し、拠点に足を運べない養育者の登録につながった。

〇平成29年度のサテライト開所に伴い、尻手、矢向地区の登録希望者が増えている。そのため、平成30年度からは、入会説明会の受け入れ人数を増やし、参加者が説明を聞きやすいよう、わっくん託児サポーターを配置するなどの工夫をし、利用会員の増加につながった。

〇平成29年度(サテライトは平成30年度)より、ひろばでのおためし預かりが始まり、子育てサポートシステムをPRする機会が増え、その後の活動にも繋がっている。（おためし預かり後、継続して依頼している割合、平成29年度→14%、平成30年度→42%、令和元年度→28%）

〇緊急な依頼、配慮が必要な依頼などには、丁寧な聞き取りによりニーズを把握し、子育てサポートシステムでできることを共に考え、活動の提案を行った。
〇体調がすぐれないなど、来所が難しい養育者には訪問をし、緊急登録を行うなど、丁寧に対応し登録につなげた。
〇事務局が拠点にある強み
・朝の拠点全体ミーティング、月に一度の区とのスタッフミーティングにより、ひろばスタッフと連携してニーズを把握し、養育者に寄り添ったサポートができた。横浜子育てパートナー相談から登録、活動につながるケースも増えている。
・リフレッシュ利用に関しては、横浜子育てパートナーと連携し、拠点の利用者、出張入会説明会参加者などに積極的にPRした結果、利用が増えた。
・入会説明のみ希望の来所者にもひろば利用を勧め、その後の利用に繋がっている。
・第2子出産時の上の子の預かりのニーズが大変多く、活動につながり、出産後もひろばと連携してサポートができ、養育者の安心につながるケースもあったが、預かりに対応できない場合も多く、課題として区と共有している。
・ひろばスタッフの案内や、ひろば預かりを見ることをきっかけに、事業を知り、子どもが会員と楽しく過ごす様子に接することが、預かる事への抵抗、不安感の軽減につながっている。

3　会員へのサポート
〇事前打ち合わせにコーディネーターが同席して、会員の生活様式等を確認してコーディネートしている。さらに、活動中に地震災害があった場合の避難先である、地域防災拠点の確認や個人情報保護についての確認などを行い、会員双方ともに安心安全な活動が行えるよう、丁寧な打合せを心がけた。
〇提供会員2名をサブリーダーとして継続委嘱し、緊急な依頼、対応に配慮を要する依頼の際に、中心となって活動してもらっている。
〇提供・両方会員間の交流、意見交換、活動意欲を高めることを目的とした交流会や活動の継続を援助できるようなスキルアップ研修（虐待防止、施設見学、救命救急、発達への対応）を会員のニーズを把握しながら開催した。
〇子サポ通信を年3回発行し、上記交流会、スキルアップ研修会等の情報提供や報告と共に、活動において注意が必要な事項の確認をした。（個人情報取り扱いについてなど）
〇利用会員だけではなく、提供会員へも、日頃の活動の様子を聞き取ったり、それぞれに合った活動を提案し、事務局との関係を保つことで、会員登録継続に努めた。
〇事務所開所時間外の活動に対応ができる緊急携帯があることで、提供会員の支えとなり、安心、安全な活動を提供できた。
〇ネットワーク事業でつながった機関へ、会員向け交流会の講師派遣（つるみ地域活動ホーム幹）、施設見学（障害児地域自主訓練会エンゼルの会）などの依頼をすることができ、会員が活動に活かせる情報提供ができた。

4　子育てサポートシステムを入り口とした支援へ
〇預かりニーズの中で、養育者のSOSを受け止め、区、横浜子育てパートナー等と連携して、横浜子育てサポートシステム以外の必要な社会資源につなげた。（預かりだけでは解決出来ない複雑な状況を把握した場合等）
〇第2子出産時のサポートを求める声が多いこと、育児のSOSが預かりニーズとして表れていること、などを毎月の定例会やスタッフミーティングで区に報告し対応を検討している。拠点のネットワークの中でも共有することができた。
〇スタッフは、活動を含め、様々な場面で受けた相談内容を把握し、必要がある機関へつなぐなどの対応が、より的確に行えるように、横浜子育てサポートシステムコーディネーター―研修会、法人研修会、外部研修会、スーパーバイザーによる検討会などに積極的に参加し、スキルアップを図っている。

評価の理由（区）

①区が関係する機関（主任児童委員や小中学校校長会、ケアプラザなど）の会議で周知できるよう調整している。これにより地域へ現状や課題とともに周知が進んでいる。また、転入時の窓口対応や新生児訪問等で職員から利用案内をしている。②育児相談を受ける際、対象者のニーズに合わせ子育てサポートシステムを紹介。必要時には緊急の対応をお願いできている。③提供会員の状況に合わせたコーディネートや交流会や研修など会員の活動を丁寧に支えていただいている。会員が対応に困っている時には拠点と共に対応の助言を行いサポートしつつ、会員のスキルアップにつなげている。④預かり依頼の相談から家族関係や子育て全般にかかる相談を把握した場合、専門機関につなげられている。今後はその対応実績を踏まえてネットワーク機能を活用し、課題解決に取り組んでいきたい。

拠点事業としての成果と課題

（成果）
・サテライトの集団入会説明会、おためし預かり実施により、周知が広がり、会員数が増加した。
・横浜子育てパートナー、ひろばスタッフと連携し、子サポを初めて利用する方の不安が軽減された。
・区と協力して、イベント等でチラシの配布を行い、周知することが出来た。
・多様なニーズのある会員に対して、区、横浜子育てパートナーと連携して丁寧に対応出来た。
・詳細な依頼の聴き取りとニーズに合ったコーディネートをし、細かな事前打ち合わせを行うことで、継続的な活動につながった。

（課題）
・地域による提供会員の会員数や活動量の偏りを少なくするため新たなPR先を開拓し、提供会員数増加に努める。

振り返りの視点
ア　区民に対して、子育てサポートシステムについての周知活動を行っているか。
イ　提供会員数拡大に向けた取組がなされているか。
ウ　養育者に対して、必要時に利用相談しやすく感じられるような周知活動等の工夫をしているか。
エ　会員が相互の合意のもとに気持ちよく安全に活動できるよう、会員の状況に応じた活動方法の提案や、丁寧なコーディネートができているか。
オ　会員の声の把握に努め、必要に応じて活動内容の調整や会員のフォロー、追加のコーディネート等を行っているか。
カ　提供・両方会員が活動の意義を感じながら、安心・安全な活動を継続して行えるよう、研修会等の取組がなされているか。
キ　会員の活動意欲を高めるため、会員間の交流をはかる取組がなされているか。
ク　就労に関する以外の養育者のリフレッシュ等の理由での利用を促進する取組がなされているか。
ケ　会員間で授受される個人情報を会員が適正に取り扱うことが出来るよう、注意喚起や研修等の取組がなされているか。
コ　援助活動の調整等を通して把握した子育てに関するニーズを、必要な支援や新たな事業、事業の見直しにつなげているか。
サ　専門的対応が必要と考えられる相談について、こども家庭支援課との連携、連絡体制のもと、適切に対応しているか。
シ　子育てサポートシステム以外の子育てに関する相談に対して、情報提供等の支援ができているか。

７　利用者支援事業

目指す拠点の姿	（参考）2期目振り返りの課題	自己評価（A～D）	
		法人	区
①拠点における利用者支援事業が、区民や関係機関に広く認知されている。	・横浜子育てパートナーの存在がどれだけ区民に認知されているかを、今後拠点についてのアンケートを取る際に確認していく必要がある。 また、区民への直接的なPRの機会として、新たに、母親教室（現在は母親・両親教室）や育児教室（現在は赤ちゃん会）でのPRを検討していく。 ・他機関連携をすすめ、相談の受け皿を広げていく。	B	A
②相談者に寄り添い主体性を尊重しながら、個別相談に応じ、適切な支援を行っている。		A	A
③子育て家庭を支えるためのネットワークの一員として、包括的な視点を持って子ども・子育て支援に関する関係機関や地域の社会資源との協働の関係づくりを行っている。		B	B

評価の理由（法人）

（主なデータ）
〇利用者支援活動　（件）

	わっくんひろば		サテライト	
	平成30年度	令和元年度	平成30年度	令和元年度
周知活動	65	63	45	47
研修参加	14	7	21	13
出張相談	32	90	85	86
電話相談	66	38	2	4
面接相談	318	422	484	471
訪問先	48	62	62	65

〇鶴見区全区アンケートより
・横浜子育てパートナーを知っていますか？：36.7%
（わっくんひろば、サテライト利用経験あり　　知っている：わっくんひろば52,5%　サテライト57,9%）
・横浜子育てパートナーに相談したことがありますか？　ある：（全体）22%　（サテライト地区　矢向・市場）　ある：32,3%
〇拠点利用者アンケートより（令和元年度実施内容）
・横浜子育てパートナーとゆっくり相談したいと思いますか？
そう思う/どちらかといえば、そう思う　わっくんひろば　63%　サテライト　55%
※横浜子育てパートナー：以降、子育てパートナーと表記する。

1　子育てパートナーの周知活動
鶴見区全区アンケートによると、子育てパートナーの認知度はまだ低く、また拠点利用経験があっても子育てパートナーを知らない人がいることから、拠点内外の周知活動にさらに力を入れ、子育てパートナーの認知だけでなく、合わせて拠点の新規利用拡大に心がけた。
〇拠点内での周知
・初来所の方には相談専任のスタッフ「子育てパートナー」がいることを案内し、相談につながっている。
・チラシの全体の色合いや雰囲気を優しい印象にリニューアルし、拠点内、鶴見駅の連絡通路、地域ケアプラザなどに掲示している。
・ 拠点では、イベント＜こうのとりくらぶ（妊婦向け）・赤ちゃん体操とママビクス（2.3か月の赤ちゃんとママ向け）・ベビーマッサージ（首が座った赤ちゃんとママ向け）・アラフォーの会・双子の会・タッチケア（4か月頃までの赤ちゃんとママパパ向け）・赤ちゃん集まれ（0～6か月の赤ちゃんとママ向け）＞での周知をしたことで相談につながっている。
・ひろばスタッフによる相談の中で、内容によっては子育てパートナーへの相談にもつながることもあり、連携ができている。
・わっくんひろば、サテライト合同のPRカード作成。ひろばが2か所あること、地域によってはどちらでも養育者が選んで来所できることの周知につながった。PRカードには子育てサポートシステムの情報も載せているので、相談と預かり両方の利用につながっている。
・子育てサポートシステムとの連携により、子育てサポートシステムの利用者にも子育てパートナーの周知が広がっている。
〇関係機関への周知
・各関係機関へ訪問し、事業説明を行うとともに、子育てパートナー周知のための連携を依頼した。（保育園・園長会・地域ケアプラザ・民生委員・こんにちは赤ちゃん訪問会議・主任児童委員会議など）
・赤ちゃん会（保健師による1歳未満の赤ちゃんとその養育者、妊婦さんの会）に出向き、地区それぞれの子育て環境を把握した。事業説明や拠点の情報提供を行い、拠点の新規利用につながった他に、妊娠期の相談を受ける時に赤ちゃん会の様子を伝えられるなど支援に活かせている。
・平成30年度から区の協力により、両親教室に毎月参加し、拠点案内、事業内容を参加者に周知することができ、直接、話をすることで出産前からの拠点利用が増え、産後の相談にもつながっている。
・近隣の産婦人科に訪問、出産後まもない親子への事業説明、初めてでも安心して行ける拠点の情報提供を行い、来所につながっている。
・親と子のつどいの広場や子育てサロンに訪問、事業説明、拠点の情報提供を行ったことで来所、相談につながっている。
・トレッサ横浜内の授乳室で港北区パートナーとともに出張相談を行っている。拠点に遠い地域の親子に出会える場となり、拠点を知ってもらい、拠点の利用、相談につながっている。
・育児支援イベント、園庭開放訪問で情報収集を行い、その時に保育園から得た園庭開放、イベント情報などを拠点利用者に伝えたこと

2　個別相談
事業が徐々に周知され、相談を目的に来所される方が増えている。相談者に寄り添い、傾聴し、丁寧な対応を心がけた。相談者が必要としている情報提供を行い、それぞれのニーズに合わせた援助ができるように心がけた。継続対応も増え、今までの経緯をふまえた対応ができている。
〇拠点内での相談
・相談者に対して、単なる情報提供で終わらせるのではなく、会話の中で見えてくる心配事、悩み事を一緒に考えていくようにしている。妊娠中や出産後まもない時期より日常的に寄り添うことで、子どもの成長とともに変化していく養育者の成長を支えている。

・子育て支援情報を相談対応時に利用しやすいように整理、収集した情報を常に更新し、情報提供に役立てている。
・ひろば相談から子育てパートナー相談へつなげ、相談後はミーティングでその後の対応を確認している。
・横浜子育てサポートシステムと連携し、お互いの強みを生かし多様なニーズのある親子に対して丁寧に対応している。
○関係機関との相談連携
・女性相談を担当しているNPO法人みずらと連携し、家族の問題への対応について情報交換し、相談のスキルアップに努めている。
・両親教室、赤ちゃん会、近隣の産婦人科に訪問し、妊娠期や出産後まもない母親に出会い、拠点の利用、相談につなげている。
・地区担当の保健師とスタッフミーティング、口頭連絡により、対応を確認している。
・子育て支援者定例会に毎月出席し、情報交換し、連携を深めている。
・子育てパートナー連絡会に参加し、相談対応について情報交換し、他区の取り組みを積極的に取り入れている。
・市主催、法人主催、外部機関の研修に積極的に参加し、その学びを拠点スタッフと共有し、相談のスキルアップに努めている。
・東部地域療育センター及びその相談ルームいろはとも連携し、発達に心配を持つ親子への対応を確認することができている。
・専門相談担当の助産院と連携し、利用者を直接、助産師に紹介することができるようになり、対応を確認できている。

３　地域連携

拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域とのつながりの強化に努め、情報を収集し、利用者に提供できるように心がけた。また、顔の見える関係を大切にし、支援につながる新たなネットワークの構築に努めた。
○関係機関との連携の強化
・子育てサロンに順次訪問し、拠点から遠い地区でも気軽に相談できる出張相談会を開催した。また担い手とも交流することで地域それぞれの環境・雰囲気を感じ取ることができ、地域の特徴に合わせた育児支援を考えるきっかけになっている。
・地域の子育て支援の場（親と子のつどいの広場、赤ちゃん会、訓練会、乳幼児健診）を訪問し、得た情報を必要に応じて案内している。
・さまざまなネットワーク会議に参加し、ネットワークでつながった各関係機関からの情報を利用者に案内している。
・地域の育児支援イベント会場で情報提供、出張相談を行ったことで保育士と顔の見える関係を築いている。
○利用者支援事業を通した新たなネットワークの構築
・区民活動センターとお互いに情報収集・提供することができた。そのつながりから、鶴見区子育てワークショップの開催の仲介をした。
・地域の居場所でもあるコミュニティハウス、鶴見スポーツセンターを訪問し、その施設の立地、機能を生かした連携を検討した。
・トレッサ横浜での行政相談、隔月の出張相談、イベントでの相談、情報提供を担当。事業を通して港北区拠点と連携が深まっている。
・拠点などの公共機関を利用しない養育者とアクセスするために子育て支援事業を行うスーパー、ドラッグストアを訪問し、情報交換。子育てパートナーの情報を掲示、配布できるようになった。
○関係機関との課題の共有
・専門相談、講座の講師と常に情報交換し、相談対応に活用するとともに、見えてきた課題（発達や家族の問題等）を共有している。
・他拠点からの情報提供により、里親希望の方のためのスキルアップ研修に参加し、その現状を把握した。希望される方に地域の子育て情報を提供し、拠点に来所する親子の様子や母たちの声を伝えることができた。
上記の活動を通して、子育てパートナーが多くの機関と交流することによって、拠点のネットワークがさらに強化された。交流を続けることにより、利用者に最新の情報を提供できるようになった。サテライトと2か所での活動とその連携により、鶴見区全域での幅広い情

評価の理由（区）

①区が主催する子育て支援者等の関係機関の会議で周知ができるように調整した。会議で事業の紹介だけでなく、子育ての現状や課題について発信できている。また、区が対応している子育て相談で子育てパートナーへの相談を案内している。利用者支援としての認知度はアンケート結果では思ったより低かったが、利用者にとって拠点が相談できる場所であるという認識は定着してきていると感じている。
②対応に苦慮する相談は、スタッフミーティング（緊急時はタイムリーに）で検討し、対応力のスキルアップにもつなげている。
③子育て支援の関係機関にこまめに出向き、顔の見える関係づくりが進み、相談や協力関係が構築され、新たな取り組みが生まれている。今後は利用者支援として対応してきた事例の積み重ねや検証から区としての課題を拠点と共に考え、課題解決に取り組む必要がある。

拠点事業としての成果と課題

（成果）
・引き続き子育てパートナーの周知に努め、拠点の新規利用にもつながった。
・相談者に寄り添い、ニーズに合わせた援助が継続的にできている。
・出張相談に力を入れ、ひろばに来られない方の相談対応を行った。
・地域を訪問したことにより子育てパートナーの周知や関係機関との連携が強化できた。
（課題）
・今まで連携してきた関係機関との関係を大切にしつつ、新たなネットワーク作りにも努める。
・周産期の方への支援を一つ一つ積み重ねながら母子保健コーディネーターとの連携方法を検討し、拠点の持つ7事業を活かして妊娠期からの切れ目のない支援を目指していく。
・拠点利用のない養育者へ向けて、情報提供や相談をしやすいようなアウトリーチ事業を検討する。

振り返りの視点

ア　利用者支援事業を幅広く区民や関係機関に周知しているか。
イ　養育者に対して、気軽に相談しやすい仕組みづくりや工夫をしているか。
ウ　最新の情報を収集し、活用できるよう工夫しているか。
エ　相談に対しては、傾聴に努め、ニーズを把握して対応しているか。
オ　拠点内連携、関係機関への紹介・仲介・支援依頼等について、相談者が円滑に利用できるような対応をしているか。
　また、専門的な対応を要する相談については、内容に応じて速やかに関係機関に紹介・仲介する等、適切な対応を行っているか。
カ　拠点内連携、関係機関への紹介・仲介後も必要に応じて役割分担を確認しながら継続的な関わりをもっているか。
キ　相談の対応状況や支援の適切さ、拠点内外での連携状況等について、多角的な視点から振り返りや検討を行っているか。
ク　拠点のネットワークを活用し、関係機関や地域の社会資源との関係づくり・関係強化を行っているか。
ケ　利用者支援事業の周知や個別相談等の取組を通じて、支援につながる新たなネットワークの構築を行っているか。
コ　把握した課題を関係機関等と共有し、拠点事業の充実や、必要な支援の調整や見直し、不足する資源の調整や提案につなげているか。

協働事業プロセス相互検証シート

１　事業計画段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

・2期目の振り返りを通して、常に課題を意識して事業を実施するために、計画段階で毎月の定例会の議題設定をするなど見通しを持って取り組むことができた。区と拠点がともに目標に向かって実施する内容を確認することができ、課題としていた、ネットワークの構築や人材育成事業の充実を図ることができた。

【今後改善が必要と思われること】

・定例会や単年度振返りを行うなかで、相互に共通の認識を持って重点目標に取り組むことができるようにする。計画段階から優先順位を確認し合いながら事業を進めるように改善していくことで短期的な目標だけでなく、長期的に取り組む課題を明確にしていく。

２　事業実施段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

・毎月の定例会で、1カ月の事業の報告、検討事項、連絡事項に分けて、7事業について共有し、振り返り、時には見直しをしながら事業を進めている。
・単年度の事業振り返りを通して、実施内容を確認することができている。
・事業の進捗状況については拠点会報等を通じて、外部にも発信することができた。

【今後改善が必要と思われること】

・事業の見通しをもって、次の課題（ステップ）を常に意識し、共通の認識を持って事業に取り組む必要がある。
・事業実施中にも、終了時の見通しをもって話し合いをしながら進めていくことができるよう、定例会等の進め方を検討していく。

３　事業の振り返り段階

【共有できたことや認識に違いがあったこと】

・2期目振り返りの課題を意識し、定例会で目標を確認しあい、ネットワーク事業や人材育成事業での成果を確認することができた。
・拠点利用者だけでなく、子育て世代のニーズを把握するため全区アンケート調査を実施することができた。
・サテライトが開所となり地域に根差し、より密着した活動ができるよう、定例会等を通じて振り返りを行い、着実に活動を積み重ねてきたことで運営が軌道にのっている。

【今後改善が必要と思われること】

・全区アンケート結果や振り返りで話し合った、子育て世代、担い手、区の現状について確認し、次年度以降の事業に反映できるよう振り返りをしていく。
・事業の振り返りを通して、事業の効果を意識的に共有していく必要がある。

鶴見区地域子育て支援拠点事業　有識者を交えた事業評価　実施概要

対象事業	鶴見区地域子育て支援拠点事業
対象期間	平成29年度～令和元年度（3か年度）
事業の実施者	社会福祉法人　青い鳥
	鶴見区こども家庭支援課
実施目的	１　これまでの3か年度の事業を振り返り、成果や課題、今後の方向性などを整理するために実施するものです。 ２　市民協働事業の実践を通じて経験を蓄積し、その後の市民協働や市民協働事業に活かしていくため、また、当該協働事業の当事者だけでなく、多くの市民等の協働への参加意欲を高めるため、当該評価を公開し、透明性を高めていくために実施するものです。
振り返りの視点	拠点事業は、区と運営法人との協働により進めています。毎年度、事業ごとに定めている「目指す拠点の姿」に沿って役割分担し、行動計画を立て、年度末には「振り返りの視点」に沿って取組の振り返りを行いながら事業を進めてきました。 そこで、今回の事業評価は、「目指す拠点の姿」ごとにに3か年度の取組を照らしながら行いました。 【参考】 拠点の7事業 １　乳幼児の遊びと育ちの場及びその養育者の交流の場の提供（親子の居場所事業） ２　子育てに関する相談及び関係機関との連携に関すること（子育て相談事業） ３　子育てに関する情報の収集及び提供に関すること（情報収集・提供事業） ４　子育てに関する支援活動を行う者同士の連携に関すること（ネットワーク事業） ５　子育てに関する支援活動を行う者の育成、支援に関すること（人材育成、活動支援事業） ６　地域の住民同士で子どもを預け、預かる支え合いの促進に関すること （横浜子育てサポートシステム区支部事務局運営事業） ７　子育て家庭のニーズに応じた施設・事業等の利用の支援に関すること（利用者支援事業）
実施時期	令和2年5月～令和2年8月
実施方法	１　拠点の7事業の「目指す拠点の姿」に対して、区及び運営法人それぞれの自己振り返りを実施しました(令和2年4月～5月)。 【参考】 地域子育て支援拠点事業評価シート　4段階自己評価の意味 Ａ　よくできた／Ｂ　できた／Ｃ　あまりできなかった／Ｄ　まったくできなかった ２　それぞれの自己振り返りをもとに、両者で内容を確認し、意見交換しながら相互振り返りを実施しました（令和2年5月～8月　計10回）。 ３　相互振り返りをもとに、拠点事業に造詣の深い有識者を交えて、「鶴見区地域子育て支援拠点事業有識者を交えた事業評価（相互評価のまとめ）」を実施しました（令和2年9月２日）。 ※振り返りに際しては、第3者の意見等を反映させるため、拠点利用者や区の乳幼児健診受診者等を対象に実施した子育てアンケートの声も踏まえて実施しています。